

氏 名	丸 中 秀 格
授 与 し た 学 位	博 士
専 攻 分 野 の 名 称	医 学
学 位 授 与 番 号	博 甲第5476号
学 位 授 与 の 日 付	平成29年3月24日
学 位 授 与 の 要 件	医歯薬学総合研究科 機能再生・再建科学専攻 (学位規則第4条第1項該当)
学 位 論 文 題 目	Kikuchi-Fujimoto disease: evaluation of prognostic factors and analysis of pathologic findings (菊池病(組織球性壞死性リンパ節炎)の病理学的な予後予測因子についての検討)
論 文 審 査 委 員	教授 松川昭博 教授 岩月啓氏 准教授 吉村禎造

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

組織球性壞死性リンパ節炎として知られる菊池病(Kikuchi-Fujimoto disease)は、頸部リンパ節腫張・発熱・倦怠感などを症状に、比較的アジア人女性に多くみられる原因不明の病気であり、日常耳鼻科の日常診療で遭遇する病気である。通常予後は良いが、数ヶ月長引くことや時に1年以上長引く症例も経験する。

菊池病の予後を予測できる因子を見つけ出すことは、患者の安心や、ある程度の副作用を伴うステロイド投与の決定に役立つ可能性がある。今回我々は、臨床的特徴、血液検査結果、および病理学的所見(各検体中の芽細胞(blastic cell)の増殖および凝固壊死(coagulative necrosis)の占拠に焦点を当てた)で予後を検討した。

「暖かい時期(春から夏)の発症」は治癒期間が延長し、「sIL-2r高値」「末梢血異型リンパ球が出現すること」および「リンパ節検体中芽細胞占拠率(70%)以上」はこの疾患の治癒期間の短縮に関連する可能性が示唆され、侵襲の少なさから「末梢血中の非定型リンパ球の検出」は菊池病の治癒までの期間を予測する最も便利な方法であると考えられた。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

菊池病の予後は良好であるが、数ヶ月、時に一年以上の経過をたどる症例もある。申請者は予後予測因子を明らかにするために、菊池病43例を対象に、臨床的特徴、血液検査所見、および病理学的所見を解析した。その結果、「暖かい時期(春～夏)の発症」では治療期間が延長し、「可溶性IL-2レセプター高値」「末梢血異型リンパ球の出現」および「リンパ節中の芽細胞占拠率70%以上」では治癒期間が短縮することを見いだした。早期治療群では、リンパ節中に活性型CD8T細胞が多いことも明らかにした。現象論を示した研究であり、症例数は少なく、そのメカニズム解明など今後の課題はあるものの、侵襲の少ない「末梢血中の異型リンパ球の検出」が菊池病の治癒までの期間予測に役立つ可能性を示した点は評価できる。

よって、本研究者は博士(医学)の学位を得る資格があると認める。